



師範 河北昭子さん(引水)

梅の造花を見て、奇麗と思つた気持ちは、それを作つてみたいという気持ちに昇華しました。その後、昭和57年に師範の認定を受け、活動を続けていますが、第一に造花をつくる後継者がいないことが本心に心配です。小さい子どもたちにも教室を開いて教えているのですが、その子どもたちが成長しても参加して欲しいと思っています。私も「活動はもうできない」と思いながら、現在に至ります(笑)。でもできる限り活動を続けられたらと思つてます。



師範 菅原アイ子さん(室)

昔、婦人会の活動をしていたときに「梅の造花」を知りました。興味を持ったので、保存会で活動を始めました。師範になるための試験があるんですが、活動を始めて5年くらいで師範になることができました。それから今まで「継続は力なり」と思い活動を続けています。今後についても、材料(蓮草紙)が不足していることもあり心配しています。今一度原点に戻って、PRをしていきたいと思っています。皆さんにも、教室などにもっと参加してほしいですね。

栄枯盛衰

空白の10年がもたらした不安

又太郎さんが亡くなると、造花を作る部品の提供が無くなりました。それだけであれば梅の造花を作成することはできるのですが、又太郎さん以外は「蓮草紙」の入手先を知りませんでした。梅の造花で大切な部分である、花びらを作ることができなくなりました。

そして、梅の造花の伝統は10年ほど一時的に途絶え、

えてしまいます。

蓮草紙の発見

そして保存会の結成

それから、蓮草紙の入手先が見つかるのに約10年を要しました。そして、梅の造花作りは再開するのですが、「これだけの素晴らしい文化を途絶えさせてはいけない」という10年という長い年月がつくった想いは、ついに「肥後大津民芸造花保存会」の結成につながります。昭和47年に当時の

素晴らしい文化の伝道師

肥後大津民芸造花保存会

を続けていますが、会員の高齢化も進み、後継者不足の問題がでてきます。そして、作成者が減ることは、新しく大津町にやってきた住民が梅の造花を知る機会が減ることにつながります

保存会代表の新興ツキ子さんを初めとする師範の皆さんは、子どもたちに造花の素晴らしさを伝える伝道師です。大津中学校の総合学習でも教え、夏休みには小学生を対象にした教室も行っています。「子どもたちは『集中力がついた』って言ってくれるんですよ」とうれしそうに話す新

第2部

多くの思い

の化学変化

大津町商工会長吉田定さんを初代会長として保存会が設立されます。

しかし、伝統を伝える講師がいなければ保存会としては成り立ちません。そこで、故藤由恵泉先生が講師となり、講習生に技術を伝えていきます。藤由先生は名誉師範になり、試験を行い11人の師範が誕生しました。

保存会の歩みは始まったばかりでした。伝統を伝えるために数々の講座を行いました。また、多くの造花の贈呈を

私は生け花もやっているんですが、梅の造花を見て、造花づくりも生け花に関連するところがあると思ひ保存会に参加しました。それからずっと活動しています。造花の教室では、子どもから大人までいろいろな出会いがあるので、とてもパワーをもらっているんですよ。特に小学生や中学生とのふれあいが楽しみです。これからは、今までどおり活動することはもちろん、若い人たちにも口コミで広がっていくようにしたいですね。小さい活動は、大きな効果を生みますから。



師範 福田ユリ子さん(大津)

行ったり、毎年の地藏祭での展示を行ったりすることで、町民の皆さんも梅の造花を見る機会が多くなってきたのです。

テレビや新聞にも取り上げられ、伝統の芸術を継承していくために藤由先生を始め、保存会の皆さんは努力を惜しみませんでした。

あれから35年

造花の継承のために警鐘が鳴らされる

あれから35年。保存会は、活動へ

開さんは、大津の宝である子どもたちに、大切な故郷の文化を伝えていきます。

しかし、活動を行っても、情報過多多気味である現代社会では、興味を持ち続けてくれる人が少なく、会員も減り、一時は11人居た師範も今では5人のみとなりました。

「何が足りないのか…」あせる気持ちとは裏腹に過ぎ去る時間。あつという間に35年が過ぎました。

このままではいけないという思いは、明日観(明日の観光

大津を創る会)への加入や毎月1回の教室の開催などにつながりました。どちらも今年から開始した活動です。

藤由先生から教えてもらった技術を進化させながら、受け継いでいかなければなりません。警鐘を鳴らすことは動くことでもありません。これら行動は、きつと造花の明日を照らすことでしょう。



師範 富士川マサヨさん(大津)